

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑮

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

原因を「わたし」の側におく

1月号で書いた新入生オリエンテーションでは、世界人権宣言の授業に先立って人権教育担当の紹介をします。その冒頭「人権は『思いやり』ではない」と言います。すると、作文の中に「ずっと人権は『思いやり』のことだと思っていた」という感想が出てきます。なぜこのような感想が出てくるのでしょうか。わたしの勤務校では、毎年新入生に対して入学時に人権アンケートをとっていますが、いくつかの人権課題のうち、障害者問題を知っていると答える生徒のパーセンテージがいつも一番高い結果になります。そこで、生徒に小中学校時代にどんなことをしたかたずねると、アイマスク体験や車椅子体験といった答えが返ってきます。おそらく、そのような体験学習を通して「障害者には思いやりをもって接しなければならない」と思ってしまうのでしょうか。わたしは、このような生徒たちにゆさぶりをかけたいと思っています。

わたしをこのような考えにしたひとつのできごとがありました。2007年、ある友だちから、障害者が自立生活をするための研修講座であるピアスクールというところで話をしてほしいと言われました。「なんでわたし？」と思いながらもなんとか話を終え、友だちを待つためにロビーにいました。そこに脳性麻痺と思われる方がこられました。瞬間、チラリと「話しかけられたらめんどくさいな」と思いましたが、他に行くところもないので、そこにいました。しばらくして、その方が何やら話しかけてこられました。案の定、言語障害があるため聞きとれません。何度も聞き返していると、その方は「仕方ないな」という感じで50音のボードを出されて、ひとつひとつ文字を指してくださいました。おっしゃっていたことは「どこから来たんや」でした。その瞬間、「あれ？」と思いました。「英語で話しかけられてわからない時は『自分が英語ができないから』と思うのに、なぜ脳性麻痺の人の話がわからない時は相手のせいにするんだらう」と思ったのです。その瞬間「この人の話がわからないのは自分の問題だ」と気づきました。その後、文字盤のおか

げでお酒とかタバコとかのたわいない会話を楽しむことができました。やがて友だちがやってきて、その人と普通に会話をはじめました。その後、友だちは「慣れたらわかるけどな」と言っていました。おそらくその方は、ひとりであるわたしの相手をしてやろうと思われたのでしょうか。なのに言葉が通じなかった。実は「めんどくさい存在」は、わたしの方だったのです。これ以降、ある人があることができない時、その原因をその人に求めるのではなく、それができない環境をつくる「わたし」の側においてみることにしました。

こんなわたしは、障害当事者に来てもらう人権講演会は、「障害による不便」や「その不便を克服した人」といった話ではなく、「障害とは何か」を話す人に頼みたいと思っていました。そこで「この人」と思ったのが、かつてわたしも「本」として参加した「リビングライブラリ」で友だちになった小林春彦さんでした。小林さんは18歳の時に脳梗塞が原因で高次脳機能障害になりました。それ以降の経験の中で、いつしか「障害の軽重ではなく困難の軽重」に着目するようになったと言います。つまり、重い障害があっても環境を整えば困難は減り、逆に軽度障害であっても環境によっては困難が増すとされるのです。さらに、生徒たちに「君たちの中にも障害以外にもさまざまな困難をかかえている人がいるでしょう」と呼びかけられます。そうした生徒たちへ向けて、困難を減らすためには依存先を増やすことが大切だとされます。そして、障害者が困難をかかえるのは、依存先が少ない状況に置かれているからだだとされます。このようにして、障害が社会によってもたらされることを示されます。

実は、小林さんは「社会モデル」や「合理的配慮」といった言葉は使われません。それでも「ドラマやテレビでよく見るのは『障害者は頼りすぎ』というものですが、健常者の私たちの方がたくさん依存しているんだなと思いました」といった感想が出てきます。きっとこの生徒も、ピアスクールでわたしが経験したのと同じような経験をしてくれたのかなと思います。